

II

この第一輯の第一巻（1896—1897）の冒頭の序文（Préface）の中でデュルケームはこの年報の目的について次のように書いている。「この年報は国有の意味での社会学文献の現状を年表で表わすことを唯一のまたは主要な目的とするのではない」¹⁾とのべ、もしそういうように目的が限られてくれば、この仕事の効用はごく僅かなものとなる、「何故ならばそうした労作はまだ余り多くはないから、われわれ研究者だけに役立つ文献表の必要性は少い。われわれ社会学が現在必要としているのは各個別の諸社会科学—法史、習俗史、宗教研究、道徳統計学、経済科学などで行われている研究について規則的に情報を入手することである。そこに社会学者が自分で構成しなければならない資料が存在するからである。そうした要求にこたえることがこの年報の目的なのである。」²⁾そしてまた「社会学の現在の状況において、そうすることが、われわれの学問を進歩させる最良の方法だからである。」そして「社会学者のもたなければならない知識の量は非常に広く、多様であり、事実は多数にのぼり、しかもそれが多くの方面に分散しているので、それらを見付けるのは容易なことではなく、いつも大切な事実を見のがしかねない危険におかれているから、そうした予備的資料が研究者に自由に利用できるようになることがそれだけ必要なのであった。」³⁾この年報が刊行当時は今日ほど社会諸科学の専門化は明確ではなかったので、デュルケームのいうように隣接の諸科学の業績も余り多くはなかったかも知れないが、それでもそれらの主要なものに限っても個人でその全部をカバーすることは不可能であり、多くの人々の協力を必要とするものであった。従って年報の刊行を続けていく見通しを立てるためにも最初からかなりの人数の学者の協力によるチームを確保することが不可決のことであった。

年報の創刊をめぐったデュルケームやブーグレ、モースなど最初からの協力者間に交わされた書簡の数は夥しい数に上っていた。それに発刊当時デュルケームはまだパリには来ておらず、ボルドーに在住していたため、編集上の都合や刊行に伴う事務遂行のためパリ、ボルドー間の往復旅行のため大きな労力をさかなければならなかった。その点は甥であり、ボルドー大学で学生生活を送ったモースの存在が眼にみえない大きい力となっていたことも否定できない。また協力者の数も刊行後から加わった人も多かったことも当然考えられるのである。この年報がこうした人々の協力の所産であることは銘記されなければならないことであるが、デュルケームがはじめてボルドー大学で1987—88の講義の開講の言葉でのべている「私の担当する社会学はこれから学問だが、それは教師と受講生との協力の所産なのである」⁴⁾という意味の言句はこのことを予見していたといえるのである。

ところでこの協力者にはブーグレのようにすでに著作を出した人やエコール・ノルマル・シュペリウールを卒業してアグレジェ agrégé になったばかりの若手の人びとがかなり多く集っていたのでありこれらの協力者が一番力を注いだのは責任者であるデュルケームを中心になった責任者たちで、彼らは世界中から送って貰った各種の文献の批判的分析にあたることであった。とくに多かったのは第二巻の序文でのべているように宗教史、習俗史、法制史などの歴史に関するものが多かったようである、この第二巻の序文で次のようにのべている。「昨年の第一巻の刊行にあたってわれわれの説明に対してよせられた好意的な受容はわれわれの意志がかなりよく理解されたことの証左である。しかしこれに対しさらに補足的な説明を加えておくことが必要であると思われる。何故なら人びとはわれわれに対してまだ説明が不足しているとか、われわれの社会学の枠を余りにも拡大しすぎると非難の念をもつ人がいるから、とくに

1) この年報の序文の引用については（便宜上）J. Duvignaud (edit) *Le Journal Sociologique*, 1969, たよることにする。以下同様である。

2) *op. cit.*, p. 31.

3) *op. cit.*,

4) ボルドー大学での開講の辞は拙訳「デュルケーム「モンテスキューとルソー」(法政出版局)付録が収められている。p. 155